

# 風早北部 防犯情報 しょうなん

行動無くして結果生まれず

SHOW "No Action No-result"

高齢者の家庭内での事故が  
12年前からさほど変わっていません  
依然としてリスクは高いです



国民生活センターでは2010年12月の情報収集開始以来、家庭内の事故を含む消費生活上の事故に関するデータを継続的に蓄積。資料は2020年度以降にも参画医療機関より寄せられた事故情報のうち、65歳以上の高齢者の家庭内事故情報923件を対象に、その分析結果が今般まとめられました。

今回の分析により、事故の構造や発生状況が2013年当時と大きく変化していないことが改めて確認されました。このことから、高齢者の家庭内事故に対するリスクは依然として継続しており、改めて注意喚起を行う必要があることがわかりました。

特に「事故のきっかけ」、「危害症状」、「治療の必要性」に着目し、その原因解析を行うとともに、年齢層別の特性（65歳以上75歳未満と75歳以上）を比較分析することで、高齢期の多様なリスク要因を明らかにし、実態に基づいた効果的な予防策について、事故の再発防止のため、消費者に注意喚起することとしました。

主な事故情報としては、

- 自宅内でスリッパが脱げ、靴下が滑って転倒。橈骨遠位端（とうこつえんいたん）を骨折し、複数の骨片が見られた。
- 高さ1mのはしごに乗って庭仕事をしていた際、バランスを崩し転落。急性硬膜下出血あり。
- ストーブの前で居眠りをしてしまい、やかんの蒸気で顔面に熱傷を負った。両目とも瞼の腫れで開眼も難しくなり、腫れが引くまで入院となった。
- 柔軟剤を誤飲したことによる重症肺炎。柔軟剤をペットボトルに入れ替えて使用していたため、間違えて飲んでしまった可能性がある。
- いつも居る自宅内は安心とつい油断し、足を障害物にひっかけ転倒、打撲や骨折するケースも決して少なくありません。

こうしたことへの具体的な対策は次頁/裏面掲載チラシを是非ご一読ください。